みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Mexican Americans : Resistance and Creativity

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000791

[序章]◆越境者の抵抗文化の構築

一．国境の南から見直すアメリカ

第二次世界大戦後に育ち、一九六〇年代に大学教育を受けた世代の日本人にとって、アメリカ合衆国はかなり長い間、見習うべきモデルとしてのアメリカであった。六〇年代半ばに留学してみると、まさにアメリカは自国の発展のために学ぶべき対象であった。その頃、私が目を奪われ周囲からも教えられたアメリカが実は五〇年代のアメリカ像を引きずったものであったことを実感したのはハルバースタムの『ザ・フィフティーズ』の訳本［1997］を読んだときであった。この本をかなりの共感を覚えつつ読めること自体が今の私には一種の当惑なのである。自分の国でもないし、研究対象として専攻しているわけでもない国のことが、近くに感じられるなどということは、いかに戦後の私たちがアメリカに影響されてきたか、という事実を示すからである。

ハルバースタムはこの本の第三部三六章を「キング牧師の旗の下に」と題し、一九五五―五六年頃の公民権運動のはじまりを描いている。ここに端緒のある運動は六〇年代に高揚していたのに、たった一年しか留学しなかった私は気づいていない。アフリカン・アメリカンを含めて「エスニックなアメリカ」を私が強く意識したのは学会の

先輩に誘われて一九七六年にニューメキシコ州アルバカーキ市でメキシコ系アメリカ人の調査をしたときであった。それ以降、私が断続的に関わってきたのはヒスパニック（ラティノ）のアメリカであり、とくにメキシコ系アメリカ人のアメリカである。日本人にとっては、かなり縁の遠い人々であり、この人々の位置に自らをおいて見るアメリカが日本人のアメリカ理解にとって何の役に立つのか疑問に思うことが多々ある。しかし、これは日本の状況であって、アメリカ合衆国の方ではヒスパニックやメキシコ系アメリカ人のことはかなり重要なテーマである。

Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups［1980］に如実に表現されているように、現代アメリカは多民族社会である。そして、この多民族性をどのように考えるかについて幾多の書物が出版されてきた。これらはアメリカ史上の文脈において読み、解釈されるべきなのであろうが、それだけの素養は私にはなく、アメリカのサブカルチャーとしてのエスニックな文化にこだわる私としては、次のように簡略化して考えている。主な指標となるのはジョン・ハイアム（John Higham）とローレンス・フックス（Lawrence H. Fuchs）の著書であり、アメリカではラディカルな多文化主義ではなく「多元的統合」（プルーラリスティック・インテグレーション）が起こり［ハイアム 1994］、「エスニックな存在の組合せのパターンは歴史的に変化し、アメリカの政治文化が進展し不法移民、差別是正策、言語の諸問題が適正に対処されるうちに、より健全な多民族社会が構築され、公民文化（civic culture）の枠組み内で個人がエスニックな伝統と利益を自由に表現できるようになる」［Fuchs 1990: xviii］、という見方に大方は賛成なのである。ただし、私が傍点を付けた「統合」については人により意見の違いが大きいところであるし、「より健全な」は本当に健全であるかどうか、立場に応じて見方は異なるであろう。この議論はアメリカ史の専門家の手にゆだねるのが賢明であり［とくに五十嵐（編）2000, 油井（編）1999参照］、私はむしろ次の点にこだわる。現在のアメリカのエスニック状況を理解するにあたって、日本でもアメリカ合衆国でもヒスパニックはネガティヴなイメージで受け取られることが多いことである。そのため、昨今ではラティノという呼称を好む

人々も多い。しかし、呼称をかえたからといって、この人々の存在状況が変わるわけでもない。ここでヒスパニック（ラティノ）のアメリカを一考してもよいのではないだろうか。

そもそも、ヒスパニックというカテゴリーはあいまいすぎて、メディアや政府のセンサスの用語として使用されることに問題がある。とはいえ、現実に採用されるのは、主に国境の南のラテンアメリカ諸国から越境してくる移民を十把一からげにする認識がアメリカにあるからである。スペイン語を話しカトリックが多い、という以外は差異の多い人々を一括し、その人口の大きさ（一九九〇年のセンサスで二二三五万四〇五九人、国民総人口の九パーセント）と出生率の高さの故に、二一世紀には「米国を変えるヒスパニック」［ワイヤー 1993］というイメージを与えてしまうのである。ところが、この人々が存在しているためにどのようにアメリカが変わるのか、具体的にいえない。人口の多さがアメリカ文化を制するとは限らないし、前述のフックスの論のように、公民文化がヒスパニック（ラティノ）をアメリカナイズすることが充分予測されるからである。

ところで、南からアメリカ合衆国に越境してくる人々はヒスパニック（ラティノ）という固まりをなしておらず、メキシコ系、キューバ系、プエルトリコ人などと出身地別に異なる。さらに、民族・人種、階級、宗教、移民の理由（経済移民、亡命、難民など）により差異化が進んでいる。しかも、アメリカに入ってから、彼らは変化していく。このような個人を追っていくと一般化は不可能になるので、せめてハイフォン付きアメリカ人といわれる人々の固まりのレベルで考えてみよう。ヒスパニック（ラティノ）人口の六〇パーセント強を占めるメキシコ系アメリカ人（一九九〇年のセンサスで一三四九万五九三八人）を例にとって、アメリカの一つの現実を浮彫りにし、この存在が現在と将来のアメリカ社会と文化の形成にどのような影響を与えるのかを考えてみよう。

二　メキシコ系アメリカ人への関心と無関心――メキシコとアメリカで

メキシコ系アメリカ人を語るとき、アメリカとメキシコの近年における不平等な関係をまず思い浮かべてしまう。二〇世紀においてアメリカがメキシコにポジティヴなイメージを抱いたのはメキシコ革命期と一九二〇―三〇年代までであろう。ロシア革命と同様に革命を成就したメキシコにアメリカは注目したし、革命後の輝きのあったメキシコにアメリカの芸術家、ジャーナリスト、考古学者、人類学者が知的フロンティアを求めていった［Britton 1995］。逆に、メキシコの芸術家はアメリカに招かれ、コバルビアス、オロスコ、リベラ、シケイロスなどが大活躍した。この動向は長く続かず、一九四〇年代にはメキシコ熱は冷めていった。そして、第二次世界大戦後はアメリカのメキシコへの経済的支配が年々強まり、北の大国におけるメキシコのイメージは経済的にも文化的にもネガティヴな色調を帯び現在に至っている。

この現状に対するメキシコ人の反発はステレオタイプ化され、全国紙ラ・ホルナーダ［*La Jornada* Oct. 14, 1993］に掲せられた漫画によく表現されている。アメリカ人はミグラ（国境警備官）により代表され、メキシコ人は貧しい農民の姿で表されている。絵の左下の黒い線は国境線で、そこに足を運んだ農民のワラッチェ（サンダル）履きの足をミグラが巨大なブーツで踏みつけている。この国境線が一八四八年に不当にも線引きされてしまったことが、メキシコ人には忘れられないのである。この国境がメキシコ系アメリカ人なる存在をつくりだしてしまったのである。

メキシコの北の大国への従属から生じる国民生活の矛盾はカルロス・フエンテスの最近作『ガラスの国境』［Fuentes 1996］に見事に描かれている。現代メキシコを代表する社会派小説家であり評論家でもあるフエンテス

は一九九四年一月のサパティスタの決起以降、しきりと先住民問題を論じてきたが、これに次ぐ国民的問題である北への出稼ぎと移民の現実を九つの短編に凝縮して描いた。メキシコ人が北との接触で出会う差別、暴力、性差別、苦痛などを各登場人物の人生の物語として語り、同時にそれらの人々に援助を与えられないメキシコ社会と政治の腐敗をあぶりだしている。この哀切に満ちた短編集にいささかの救いがあるのは各人各様の位置で逆境にめげず生存し続けるメキシコ人の力強さを著者が独特のスペイン語を駆使して喜劇的タッチで表現しているからである。しかし、読後、北への出稼ぎや移民がメキシコの国民的問題であることを深く意識しない人はいないだろう。

メキシコで国民を代表する知識人がアメリカのメキシコ人に注意を喚起している頃、アメリカではフランシス・コッポラが『ミ・ファミリア』[1995]を製作、総指揮した。「地獄の黙示録」や「ゴッドファーザー」で世界的に知られるコッポラはこの映画でメキシコ移民家族の三代の物語を活写している。一九二〇年代に国境を自由に渡ってきた青年ホセ、妻の国外追放、再会、高等教育を受け親から離れていく息子、警官に殺害される息子、孫の疎外など、典型的メキシコ系アメリカ人の家族の歴史が描かれている。

コッポラがこの映画を製作したのはアメリカにおける家族の絆に対する「ゴッドファーザー」以来の個人的興味からであろう。一方、フエンテスの『ガラスの国境』は、その出版年代が一九九六年であることからして、一九九四年一月に発効した北米自由貿易協定をめぐって高まってきたナショナリスティックな風潮のなかでの知的な自国点検とも考えられよう。この協定は農産物の関税撤廃をもたらし、すでに七〇年代からメキシコが依存してきた外国からの安価なとうもろこしの輸入がさらに増え、先住民や農民の生活は根底から揺らぎ、出稼ぎと移民はさらに増加している。移民は従来は北部、中央メキシコからが主であったが、八〇年代には南のオアハカ州からも増えている。メキシコ人の生活の根幹ともいえるとうもろこし生産が危機に陥り、輸出できるものといえば安価な労働力だという、この現実は国難として国民の目に映っている。そのうえ、北の大国の文化の南への浸透は顕著であり、

メキシコの文化的ナショナリズムをかき立てている。このような九〇年代後半に、フエンテスのような国民的作家が『ガラスの国境』を出版し、メキシコ国家が忘れがちな移民のことに注意を喚起することには大きな意義がある。

思えば、メキシコの学界もメキシコ系アメリカ人に対して、かなり無関心できた。一九三一年という極めて早期に人類学者マヌエル・ガミオ（Manuel Gamio）が『メキシコ移民の人生の物語—自伝記録集』をシカゴ大学から出版してはいるものの、以降はメキシコ側の移民の要因などに研究者の関心が限定されてしまい、アメリカ側に住むメキシコ系の人々については、ごく近年になって出版物が若干でるようになっただけである。メキシコ系アメリカ人についての出版物は、その大方がアメリカ合衆国において、しかも、その多くがメキシコ系アメリカ人自身によって書かれてきた。国境を越えて北の国に居ついた者は、そこでこそ人生を闘い、そこにこそ自らの文化を構築する必要があったからである。この文化はメキシコでもない、アメリカでもない、まさにハイフォン付きのメキシコ系アメリカ人の文化であり、主流文化に抵抗しつつ生きてきた人々によって生み出されてきたチカノ文化と呼ばれるものであった。

三、チカノ文化の構築

チカノという言葉の語源は定かではない。二つほど説明があるが、メキシカンからなまってできた、というのがもっともらしく聞こえる。このチカノが用語として使われだしたのが一九六〇年代の公民権運動の頃で、復権を叫ぶ戦闘的メキシコ系アメリカ人のことを意味していた。

一九七六年、私がニューメキシコ州アルバカーキ市で調査したとき、チカノはまだ一般的に流布していなかった。この州ではイスパノと自称するスペイン系アメリカ人の存在があるので（第三章参照）、主にメキシコ系アメリカ

人から発生したチカノは受容されにくかった。同じ年、ロサンゼルスに行くと、チカノは流布していた。しかし、アルバカーキでもロスでも、チカノやメキシコ系アメリカ人に関する出版物を入手しようとしても、数多くはえられなかった。アルバカーキではイスパノについての書籍は多くあり、この人々がこの州では確立した存在であることを感じた。

ところが、八〇—九〇年代にはチカノないしメキシコ系アメリカ人に関する文献は次々と出版され、全体量がふくれあがり図書館の一角を占めるようになった。量のみならず、質の向上も顕著であり、質の高いものを選んで個人で所有しても、本棚一架にはなった。南西部の人々のことだけではなく、中西部やニューヨークのメキシコ系の人々についてまで研究書がでてきた。著者にはメキシコ系の人々が多く、知識人が増えたと判断できる。

激動の一九六〇年代のチカノ運動以来三〇年経つ間に徐々にチカノ文化が構築されてきたのである。各個人が自らをチカノと認識するか否かは別にして、アメリカ合衆国に住むメキシコ系（スペイン系をも含む）の人々の文化、チカノ文化が一つの実体として姿を現わしてきたのである。三〇年の間に、それだけの人的・知的蓄積がありえたのである。私はエスニックな人々の立場にたって、そう思うのだが、ハイアムは次のように分析している。

> ……一九六〇年代末のエスニシティの復興が永続的な意義をもっているとしたら、それは境界線の防衛よりはむしろ、エスニシティの核の強化に関わっていそうだということはできる。現在のエスニック生活の活性化は大部分、エスニック集団の核を再活性化することをねらいとしていることはたしかであり、そのために新しいシンボルと新しいリーダーシップが必要とされているのである。……（中略）……それによって、チカノの運動も説明される。……
> アメリカのように流動的な——しかもきわめて多くの重要なことがエスニック集団の範疇を超越しているような——社会では、だいたいにおいてエスニック生活の質は（境界線の強さよりも）核の質によって決まる［ハイアム 1994: 250］。

この表現に依拠すれば、構築されたメキシコ系アメリカ人のエスニシティの核がチカノ文化である、といってよいのだろう。それでは、チカノ文化はどのように創られ、どのようなものであるのだろうか。

結論を先取りしていえば、チカノ文化とは本質的に抵抗文化だといえよう。メキシコ系アメリカ人の大多数は底辺の労働者であり、いわばアメリカの三Kの仕事をこなしてきたし、言語上ではスペイン語にかわって英語を習得せざるをえず、宗教上ではカトリックでプロテスタントのアメリカではマイノリティであり、文化的にはメキシコ文化を隠して「アメリカ文化」に適応せざるをえなかった。その適応と抵抗の実態は地域によって差が大きく、私はニューメキシコ州のアルバカーキ市とタオスの町でフィールドワークをし、その実態の一部にふれてきた（Ⅱ部参照）。報告書に詳細は記したが、この人々にとって重要なことは適応しつつも大勢に抵抗しながら自らのアイデンティティに目覚め、自らの文化的位置を確立することである。これを実現するためには、大衆の反乱もいるが教育エリート、芸術・文化エリートの手による文化的構築のための活動が必要である。一九六〇年代から三〇年間で、この両方の活動をメキシコ系の人々は行なってきた。そして、誤解を避けるため付言すれば、この活動に与した大衆とエリートは別々の縁遠い存在ではない。移民労働者の子弟も努力によっては高等教育を受け、アメリカの中産階級に入る。そのまま自らのルーツを忘れようとする人も多いが、周囲にあふれる「同国人」の存在を意識し、「アメリカ文化」に抵抗しつつメキシコ系アメリカ人の文化の構築に努力する人もいる。このような活動は大衆の活動と無縁ではなく、むしろそのインパクトを受けつつ展開され、大衆も知識人の支援を得つつ活動してきたことが多い。この相互作用が様々な局面で起こり、全体としてチカノ文化が生み出されてきたのではないか、と私は判断している。そこで、以下にチカノの文化的構築の五つの局面について略述していくことにする。

(1)歴史の語り方

メキシコ系アメリカ人の歴史を語るとき、私は一六世紀にメキシコから出発し現在のアメリカ南西部に到達した「征服者」の時代から考えてしまう（第一章参照）。彼らと共にきたスペイン人植民者が起源となり、この地がスペイン領（一五四〇―一八二一年）、メキシコ領（一八二一―四八年）、そして米墨戦争後アメリカ領（一八四八年―）となり、メキシコ系アメリカ人と後ほど呼ばれる人々が出現してしまったからである。

ところが、一九六〇年代に復権運動を展開したチカノ運動家は自らの起源をアステカ王国を築いた先住民に求める。この先住民の起源は現在のアメリカ合衆国南西部にあり、この地はアステカ揺籃の地アストラン（Aztlán＝アステカの場所）であり、チカノはアストランに戻って住んでいる、と考える。そこから、「アストランのチカノ」などという表現もでてくる。この考えが表明されたのは一九六九年コロラド州デンヴァーにおけるコーキー・ゴンサレスが率いる「正義のための十字軍」グループ主催の第一回チカノ青年解放会議においてであった［García 1997: 92–98］。

この考えには反論がすぐでてくる。まず、アストランの場所はそんなに北方ではなく、メキシコ国内の北西部だという意見がある［Chávez 1984］。ユト・アステカ語族の起源はアメリカ合衆国南西部であっても、アステカ王国をつくったナワの人々はメキシコ北西部から移住してきたからであろう。そしてネイティヴ・アメリカンの意見では、南西部の先住民は自分たちであり、アステカのイメージは好まない、ということである。さらに、ニューメキシコ州の「スペイン系アメリカ人」と自称する人々はアステカ王国を自分たちの文化的ルーツとは考えない。その他にも、アストラン説を批判するときりがない［Alarcón 1997: 第一章］。

そのあいまいさにもかかわらず、アストラン説はチカノや移民予備軍の共同幻想になりうる。アストランはメキシコ国家発生の源であるアステカ王国を築いた民族の発祥地であるから、メキシコ人はそこへ戻って行ってもよい

のだ、という幻想である。さらに、この神話的正当化は一八四八年の敗戦をめぐるナショナリスティックな感情や現在の両国の経済格差への怒りと結びつき、メキシコ人を元気づける。そのうち、アストランなどという語彙を知らない人までもが、アメリカ南西部は元々メキシコのものだったのだから、そこへメキシコ人が出稼ぎや移民に行っても仕方がない、という一般感情を流布させてしまう。

現在のメキシコ系アメリカ人は冷静で、「アストラン」を六〇年代に創生されたイデオロギーとみなしているが、その頃からチカノの歴史意識が芽生えたのも事実である。ルドルフォ・アクーニャの『占領されたアメリカ』[Acuña 1972]はアメリカ帝国主義の不正とメキシコ系の人々の従属過程を暴き、チカノ青年のバイブルとなった。しかし、彼の熱い筆致にはクールな歴史的実証性が欠けていると判断するむきも多かった。この批判に応えるかのように、アクーニャの書物が出版されてから約三〇年経つ間に、各地のメキシコ系の人々の歴史について質の高い研究書が、主にチカノ歴史家の手によって書かれてきた（第一章の文献参照）。テキサス州、ニューメキシコ州北部、トゥソン市（アリゾナ州）、カリフォルニア州南部、デトロイト市など中西部のメキシコ系の人々の歴史研究が続々と出版されてきた[Camillo 1979, Deutsch 1987, Sheridan 1992, Valdés 1991]。これらの作品はアメリカ合衆国の南西部と中西部の地方史の充実に貢献している。

(2)農業労働組合運動の創始者セサル・チャベスの遺産

現在のメキシコ系アメリカ人は六〇年代の公民権運動時代に先輩が展開した運動の恩恵を受けて存在している。その頃からチカノの政治的文化的目覚めが起こり、アフリカン・アメリカンやネィティヴ・アメリカンの運動と一緒になって、メキシコ系の人々のアメリカでの立場が改善されてきたからである。

チカノの運動はカリフォルニア州ではセサル・チャベス、コロラド州ではコーキー・ゴンサレス、ニューメキシ

コ州ではライエス・ティヘリナ、テキサス州ではホセ・アンヘル・グティエレスにより推進された。チャベスは農業労働組合運動、ゴンサレスは青年の覚醒を、ティヘリナは土地返還運動を、グティエレスは選挙による政治参加を目ざした。各々が成果をあげたと思うが、全国レベルで評価され、チカノが誇れる歴史的遺産となったのは一九六〇―七〇年代にピークを示したセサル・チャベスのカリフォルニア州でのUFW（統一農業労働者）の活動である。

チャベスの運動はチカノの抵抗運動を実現させるための現実的な方途を示しているので注目に値する。彼は自分の運動は民族のためではなく、大義のためにあるとしている。そして、大義の実現のため、彼はアメリカのシステムを学習して、アメリカの労働組合組織を活用して運動を展開した。この過程については多数の文献があり、日本でも中川氏の論文［中川 1992, 1993, 1994］がある。私の関心は、この運動にみられる文化的側面にある。組合員にはメキシコ系の同胞が多かったため、組合活動の効果的進展のためにメキシコの文化表象、儀礼、劇、壁画、物語詩、音楽などが活用されたからである（第二章参照）。

現在、当時と比べて組合活動が下火だとはいいながら、チャベスとその運動はチカノ史上の輝かしき事象として人々の記憶に残っている。一九九三年四月のチャベスの死去以前から、彼の生涯と運動を物語る書籍は続々と出版され、複数の児童書まで世に出るようになり、彼の存在がアメリカ史のなかに含められたとの感がある。

(3)劇場活動、物語詩(コリード)、詩、音楽

ルイス・バルデスは農業労働組合運動を支援するために農民劇場を組織し、組合員に劇を通じて歴史教育を行ない、運動の意義を説明した。彼の劇場活動は南西部諸州に及び、メキシコ系の人々になじみ深いカルパ（carpa）と呼ばれる演劇の伝統を活性化した。しかし、バルデスの本来の目的は芸術活動にあったので、チャベスと別れて

劇場活動に専念するようになった。その結果、一九七八年にはロサンゼルスで「ズート・スーツの反乱」を上演し大成功を納めた。ズート・スーツとは一九四〇年代にメキシコ系の青年の間に流行した肩幅の広い長い上衣とだぶだぶのパンタロンの組合せで、これを身につけた青年たちが一九四三年六月、アングロ系兵士と海兵隊員のメキシコ系青年に対する暴力に発憤してイースト・ロサンゼルスで起こした反乱を物語として上演したのであった。その大成功のために、スポンサーが付き、一九七九年にブロードウェイでも上演されたが、観客を集めることはできなかった。メキシコ系の人々の多いロスでは成功しても東部ではそれは難しかった。そのうえ、集客のため、劇の配役や筋に変更がなされ、アメリカ人一般に迎合する劇となってしまった［Broyles-González 1994: 165–235］。この事例はチカノの劇場活動のしかるべき限界を示している。

物語詩（コリード）は一九世紀半ばにテキサス州の国境地帯で盛んになり、メキシコ本土にも波及し、ディアス政権下とくにメキシコ革命時に大流行したとされる。国境地帯で流行ったのは、一九世紀後半からアメリカ支配に抵抗したメキシコ系の英雄、たとえばグレゴリオ・コルテスの物語をギターを弾きながら語るコリードであった［Paredes 1982: 129–150］。一八七〇―一九三〇年代に、このコリードは最盛期を迎え、その後は下火になっていった。コリードが再生するのは一九六〇年代のことで、コリードのルネッサンスと呼ばれている。この復活をもたらしたのはセサル・チャベスの組合運動であった。集会の場で、「セサル・チャベスのコリード」など様々のコリードが自然発生的に歌われたからである［Herrera-Sobek 1993: xxii–xxv: 180–183］。

そもそも、コリードは英雄詩の様相が多いので、闘いのない時代になると歌われることが少なくなってくる。しかし、近年でも詩人パット・モラはチワワ州から移住して来た自分の家族の物語をコリードに表現している［Mora 1995: 12–15］。コリードはチカノの物語型式の一つになっているのである。

詩（poema）は日常生活や人生についての感慨を表現するのに向いている。ホセ・モントヤは平凡だが哀切に満

ちた女性を詩にうたい、フアン・ゴメス・キニューネスは労働者の生活を詩に表し、パット・モラは国境の生活を詩にしている。これらは詩であり、社会批判でもある［Limón 1992: 95–154, Mora 1986, 1995］。

スペイン語は韻を合わせるのに適していることもあって、詩作はチカノ文化の一部になっている。そして、詩の朗読は音楽の世界につながっていく。詩と音楽が平行して創作されることはテキサス・メキシカン音楽（Tex-Mex）によく表れている。この国境の音楽も娯楽であると同時に社会批判である。国境警備隊への批判、収容所生活者への声援、貧しい生活の描写など、世相に応じて詩が生まれ、アコーディオンやギターなどに合わせて歌われるのである［Marre n.d.］。

劇、物語詩、詩、音楽、これらはメキシコ文化の伝統なのだが、国境の北では環境が異なるために、チカノの抵抗を表現するメディアになっており、そこで表現されていることは本国のものとは異なるのである。

（4）小説

ここ三〇年間にチカノ小説が一つのジャンルとして姿を現した。作品の数も増えてきたし、メキシコ系の人々の様々な生活を伝える作品が出てきた（第五章参照）。

男性チカノ小説はスタートも早く、一九五〇年代から例があり、アメリカ生活への統合しか道がなかった時代、次いで、六〇—七〇年代のチカノ運動の時代、その後のより深いアイデンティティ追求の時代へと、時代の推移とともに多くの小説が書かれてきた。その間、常にほとんどの著者は母国メキシコを意識しつつ自らの生活を語ってきた。エスニック文学の色彩が強いのである。

それに対して、女性作家は出発は遅いが、より高学歴で、ボーダレス（越境）とかディアスポラ（離散）の文学と呼んでよい作品を発表しつつある。このような小説では、作家の文化的位置（ロケーション）が問題になり、本

国でも居着いた国でも余所者だという意識が作品を生みだす力となっている、とパキスタン系アメリカ人作家サーラ・スレーリがのべている［スレーリ 1997］。チカナ（女性チカノ）作家も似た状況にある。ただし、母国は近いので、距離的には両方を往来することはやさしく、文化的にもメキシコとアメリカの二つの文化の間を揺れ動くことができる。「ネパントラ（ナワ語で中間）に住む者」とパット・モラは自らを位置づけ、「二つの言語を往来する喜びを持ちうる者、つまりは思考的にも言語的にも多能力性を増やす喜びを持ちうる者である」と語る［Mora 1993］。このネパントラから若干の作品が世にでてきたし、これから新しい作品も生まれてくるだろう。

次に、チカノ小説は地域文学の一部としても存在価値を発揮していくだろう。例はいくらでもあげられるが、たとえばカリフォルニアではヘレナ・マリア・ビラモンテスの『イエスの足の下で』［Viramontes 1995］は、第二の『怒りのぶどう』ともいえる作品である。時代も民族的背景も異なるにもかかわらず、二つの小説に描かれたカリフォルニアの農業労働の実態にはなんと共通点が多いことか。そしてニューメキシコ州の小説はその土地にまつわる独特の魅力のために全米で読まれるが、ルドルフォ・アナヤの作品は日本でも翻訳がでるようになった［アナヤ 1996, 1997］。近年、彼はアルバカーキを舞台にした探偵小説まで書くようになり、トニー・ヒラーマンのナバホ物探偵小説と同様、日本でも訳本が既にでた［アナヤ 1998］。そしてテキサス色が強いサンドラ・シスネロスの作品も日本で訳本が出版されるようになった［シスネロス 1996a, 1996b］。

(5)壁画、絵画、グラフィック・アートなど

メキシコ系アメリカ人は壁画の伝統をメキシコから引き継いだが、一九六〇―七〇年代に独特のチカノ壁画を制作した。屋外の壁画、それもセメント地に早急に大きな壁画を描く必要にかられた彼らがモデルにしたのは主にシケイロスであった。新しい化学塗料、スプレイガン、写真やシネマを活用して描いた下絵の迫力など、彼らがシケ

イロスから学ぶものは多かった。また、この大家の激しい政治的主張も公民権運動の一翼を担っていたチカノにとって好ましいものであった。この頃、プロの壁画家は少なく、有志がバリオ（居住区）の青年を集めて制作し、街路を往来する人が見て、壁画にこめられたメッセージを受けとめる、というかたちであった。まさに、民衆の手による民衆のための作品であった。もっとも、資金は市、州、連邦政府からの援助であることが多かった。この状況下、各地で壁画作家が輩出し、チカノの住むところどこにも壁画が描かれた。カリフォルニア、シカゴ、ニューメキシコ、アリゾナ、テキサスに著名な作品が描かれた。一九八〇―九〇年代になると、壁画は往年のごとく激しい政治的メッセージを伝えるよりは、チカノの文化表象を描くことで存在を表明したり、周囲の風景を飾るものになってきた（第六章参照）。

チカノの絵画やグラフィック・アートも美術館に展示されるようになった。メソアメリカに伝統的なコディセ（絵文書）の形式を生かした作品［Mexican Museum, San Francisco 1992］、バロック・カトリックの表象、骸骨など民俗文化の表象、母なる女性の図像や、サパタなど歴史上の英雄の図像を生かした作品などが注目を惹く。また、ラテンアメリカ的な感性や色彩の組合せは徐々にアメリカ美術界やファッション界に入っていきつつある。

四．展望

前節で概略してきたメキシコ系の「チカノ文化」はアメリカに何を提供しうるだろうか。

第一に、アストランの概念をはじめとするチカノの歴史の語り方はこの人々に特有のもので、条約や法律を中心に行われるアメリカの歴史解釈を何ら変えるものではないだろう。しかし、南西部のメキシコ系の人々の歴史の具体的な研究例はこの地方のアメリカ史の正確な理解に大いに役立つであろう。同じく、シカゴやデトロイト周辺の

メキシコ系労働者の歴史の研究例もまだ数は少ないがアメリカ中西部史の研究に貢献することであろう。

第二に、セサル・チャベスの農業労働組合活動の遺産はチカノものであるとはいえ、アメリカ労働史の一部でもある。そして、『怒りのぶどう』に描かれたような世界はまだカリフォルニアに残っていることを想起してもよかろう。

第三に、劇、物語詩（コリード）、詩は、その理解にスペイン語の知識を必要とするので、アメリカ人一般に受容されるものではないかもしれない。テキサス・メキシカンの音楽もチカノ色が濃すぎるかもしれない。しかし、カルロス・サンタナのチカノ音楽は世界的に流布している。

第四に、チカノ小説のなかでもニューメキシコ州の地方色を持つアナヤの小説はアメリカで人気を高めてきているし、日本でも訳書がでるほどである。そして、ボーダレス（越境）とディアスポラ（離散）の文学の特徴を持つ女性チカノ小説は民族を越えて読まれ、日本でも読者をえつつある。

第五に、壁画の一部は移動用壁画となり絵画のように扱われ、スミソニアン・インスティテュートに展示される作品さえでてきた（第六章参照）。そしてチカノのグラフィック・アートなどは他のラテンアメリカン・アートと一緒になって、アメリカ合衆国に新しい形象と色彩をもたらしている。

さて、ここで本序論の最初に引用したハイアムとフックスの議論に戻ってみよう。右述してきた「つくられたチカノ文化」はエスニック文化としてこの民族にかかわる人々には役立つが、果たしてアメリカ全体の「多元的統合」（ハイアム）に影響を及ぼすだろうか。徐々にではあるが影響があるだろう、というのが私の反応である。なぜなら、いったんエスニック文化が構築され、「エスニック集団の核」（ハイアム）が充実すれば、その力は外部にも及び、アメリカの「エスニックな存在の組合せのパターン」（フックス）を変化させ、それが長期的に続き、他民族集団から同様の働きかけが幾つも重なれば、アメリカ全体の社会と文化に変化が起こるだろう、と私は考えるから

である。カルロス・フエンテス［1996］の発言にならっていえば、ラテンアメリカ世界は政治経済的に没落したが、その文化的遺産は偉大で、チカノをはじめとするヒスパニック（ラティノ）によって北へ運ばれ、新しい文化的創造に貢献しているのである。チカノ文化はメキシコ文化と同じではなく、アメリカで構築されたメキシコ系アメリカ人の文化である。キューバ系アメリカ人の文化、アメリカのプエルトリコ人の文化も姿を整えつつある。アメリカ合衆国の英語世界の中でスペイン語を話す人々の世界は増殖し、新しいサブカルチャーを創造し、二一世紀のアメリカ形成に参与するだろう。